



1 本阿弥切本古今和歌集 伝小野道風  
平安時代(十二世紀)

(卷第十六哀傷歌 八四二―八五五番)

思に侍りける年の秋、山寺  
へまかりける道にて、よめる

つらゆき

朝露のおくての山田かりそめに憂  
き世の中を思ひぬるかな

思ひに侍りける人をとふらひにまかりて

よめる ただみね

墨染めの君が袂は雲なれや

絶えず涙の雨とのみ降る

女の親の思ひにて山寺に

侍りけるを、ある人のとぶらひ遣は

せりければ返事によめる

読人しらず

あしひきの山辺に今はすみぞめの衣  
の袖はひるときもなし

諒闇の年、池のほとりの花を見

てよめる たかむらの朝臣

水の面に沈く花の色さやかにも

君がみ影のおもほゆるかな

深草の帝の御国忌の日、よめる

文屋康秀

草深き霞の谷に影かくし照る日  
のくれし今日にやはあらぬ

深草の帝御時に、藏人頭

にて夜昼馴れつかうまつりけるを、諒

闇になりければ、さらに世にもまじ

らずして比叡の山にのぼりて頭

おろしてけり。そのまたの年、みな人御服脱

ぎて、あるは冠賜はりなど、よろこびける

を聞きてよめる 僧正遍照

みな人は花の衣になりぬなり苔

の袂よかわきだにせよ

河原大臣の身まかりての秋、かの家のほとりを

まかりけるに、紅葉の色、まだ深くもならざりけるを

見て、かの家によみていれたりける

近院の右大臣

うちつけにさびしくもあるかもみぢ葉も  
主なき宿は色なかりけり

藤原高経朝臣の身まかりてのまた

の年の夏、郭公の鳴きけるを聞き

てよめる つらゆき

郭公今朝鳴く声におどろけば

君を別れし時にぞありける

桜を植えてありけるに、やうやく花咲

ぬべき時に、かの植えける人身まかりければ、

その花を見てよめる 紀茂行

花よりも人こそあだになりにけれいづれを

さきに恋ひむとか見し

(あるじ身まかりける人の家の梅の花を見てよめる)

つらゆき

色も香も昔の濃さに匂へども植えけ

む人の影ぞ恋しき

河原の左大臣の身まかりて

のち、かの家にまかりてありけるに、塩竈と

いふ所のさまをつくれりけるを見てよめる

君まさで煙絶えにし塩竈のうら

さびしくも見えわたるかな

藤原利基朝臣の右近中将にて

住み侍りける曹司の、身まかりてのち、人も

住まずなりにけるに、秋の夜ふけてものより

まうで来けるついでに見入れければ、もとあり

し前栽もいと繁く荒れたりけるを見

て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

御春有助

君が植えしひとむらすき虫の音のし

げき野辺ともなりにけるかな

惟喬親王の「父の侍りけむ時によめりけ

む歌ども」とこひければ、書きて送りける奥

に、よみて書けりける ともりの

ことならば言の葉さへも消えなむ見れば

涙のたきまさりけり

題しらず 読人しらず

なき人の屋戸に通はば郭公かけて音に

のみ鳴くと告げなむ

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

やまとうた―美のこころ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 39

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十七年十月八日発行

© 2005, The Museum of the Imperial Collections